
スノーギフト

優月チルハ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

スノーギフト

【Nコード】

N0138E

【作者名】

優月チルハ

【あらすじ】

白髭を生やしたおじさんが精力的に働きだすこの季節。学園寮にて愉快的仲間達とともに日々生活を営む少年少女達にも、長い長い冬がやって来たようです。誕生日をむかえた彩葉に待ちかまえていた衝撃の事実、大晦日に学園寮を襲ったとんでもない怪物のエピソード、などなど。ウグイスの鳴き声が聞こえて来るまでの物語を、ギョツと小さな箱の中に詰め込んでみました。

【開封前の注意事項】

ほら、どこからかシャンシャンと鈴の音が聞こえてきませんか？
雪が降る夜、暖炉の前に座って、ショールを肩にかけて、万全の
防寒対策をほどこしてから、あなたに届いた小包のリボンをほどこ
てください。その中にはきつと、あなたが欲しがっていた素敵なプ
レゼントが入っているはずですよ。

そしてこれは、あなたに届いたプレゼントのおまけとしてついて
きた、一つの物語。冬の温かな思い出がギュッとつまった一冊の本
ですよ。

さあ、小包をあけて、この本を手に取ったあなた。

長い長い冬があけるまでの物語を、どうぞご覧になってください。

【始まりの雪】

木々は、秋色に染まりつつあった。アスファルトには落ち葉のじ
ゆうたんが敷かれ、歩きたびにパリッと乾いた音が響きわたる。風
が吹くとカサカサと木にかろうじて残っていた葉が大きく揺れて、
葉の上に重なるようにして落ちていった。

枯れ色に染まった草、真っ赤なもみじ。黄色いイチョウの葉。町
にはどこか哀愁が漂っており、もの足りない感じがする。

私は腕に紙袋を抱えて、アスファルトの一本道を歩いていた。こ
こは、学校の近くにある児童公園だ。遊具で無邪気に遊ぶ子供達の

姿がある。とても楽しそうだ。

私だって……私だって食堂のおばちゃんに見つからず、おつかいさえ頼まれなかったら外で思いつきり遊んでいるのに。

「むう、なんで見つかつちやつたんだろ」

私は憂さ晴らしに小石を蹴った。すると、小石は私の予想よりも高く飛んでしまい、私の前を歩いてきた拓夢たくむに当たってしまった。

「あつ」

「あつ、じゃない。まず始めに俺に対して言わなければならない言葉があるだろう」

拓夢はピタリと立ち止まったまま動かない。

「んん、つと……はい、ごめんなさい」

殺気を感じた私は、しぶしぶ謝った。私と同じく、おつかいをムリヤリ押しつけられてしまった拓夢は、いつもの五倍は機嫌が悪いというのに、今のでさらに機嫌をそこねてしまったようだ。

拓夢が無言で再び歩き始める。私は慌ててその後を追った。

また、風が吹いた。散った葉が、私の頬をかすめる。それと同時に、頬に冷たい何かが触れたような気がした。

ふつと空を見上げる。すると、空からチラチラと、綿のような白い雪が降っていることに気づいた。

「わあ……雪だあ！」

手のひらに雪がのるが、すぐに溶けてしまう。その感覚が心地よい。

「ねえ、雪が降ってるよ」

「見れば分かる」

いらだっている拓夢にとっては心底どうでもいいことらしい。

私はしゅんとした。そんな私を励ますかのように、雪がどんどん降ってくる。

秋の景色を、冬の色が塗りつぶしてしまつのも、そう遠くない未来のことだろう。

「……もう、冬なんだね」

長い長い冬の始まりだった。

【プレゼント】

12月24日。クリスマスイヴ。

この日の寮の食堂には、数多くのクリスマス料理が並び、普段は静けさの漂う食堂も、今日だけは大勢の寮生達で盛り上がっていた。食堂の中にはクリスマスツリーがあったり、壁のいたるところにクリスマスグッズが飾られていたりして、寮生達のクリスマスムードをさらに昂揚させている。

「さて、12月24日は何の日でしょう？」

浮かれ気分の寮生達がうろつく食堂内の一角に、満面の笑みを浮かべて椅子から立ち上がり、テーブルについている4人の顔を見渡しなが、唐突にそう口を開く彩葉いろはがいた。

テーブルの上にはクリスマスディナーらしく、ローストチキンやコンソメスープ、ホタテのグリルに鶏のトマトスープ煮込みなど、たくさんの豪華絢爛な食事が並んでいる。

「いきなり何よ？」

彩葉の隣に座っていた亜衣がオレンジジュースを飲みながら、怪訝そうな顔をした。

「というか、クリスマスイヴですよねぇ。時々町でイチヤイチャしているカップルを見かけるんですけど、そういうの見たらムカッきませんか？」

さらに、亜衣の向かい側に座っていた優希が、コンソメスープをすすりながら笑顔で口を開く。

「分かる分かる。あんたの気持ちは痛いほど分かるわ」

「さすが、亜衣さんなら分かってくれると思いましたよ」

二人の意気投合した会話に、彩葉は頬を人差し指で掻きながら、表情をくもらせた。

「ええっと、そーいうんじゃないかって……もっところ、クリスマスよりもお祝いしなくちゃなんないことがあるんだよ？」

「彩葉、遠回しに言ってもこいつらは永遠に理解しようとはしないと思う」

優希の隣に座っていた聖が、分厚い本からは目を離さずに指摘する。わざわざクリスマススイヴの日にまで本を読まなくてもいいのに、と思うのだが聖にとってクリスマススイヴを楽しむということは、本を読むことなのだろう。

彩葉はむすうつと頬を膨らませる。

「むう、みんな忘れちゃったの？」

「忘れてないよ。今日は彩葉ちゃんの誕生日でしょう？」

亜衣の隣に座っていた波音が、まるで天使のような笑顔を浮かべながらにこつと答えた。

「せ、正解ーっ！ さすがは波音。うんうん、彩葉もいい友達をもつたものだ」

それを聞いた彩葉は、ようやく首を何度も縦に振りながら満足そうな笑顔を浮かべた。ところが、

「それが何？」

「どうしたんですか？」

波音の話聞いていたのかいなかったのか。亜衣と優希がキョトンとした表情で彩葉の顔をじいっと見つめてきたのだ。

予想外の二人の反応に、彩葉は少しうろたえた。

「……え？ 今の聞いてた？」

「聞いてたわよ。あんたの誕生日が今日なんでしょう？ で、何を

祝うの？」

「えっと……だから、彩葉の誕生日を祝ってほしいなあって」

「祝う？ 誕生日をですか？」

「……そ、そうだけど？」

「変な子ねえ。どうして誕生日を祝うのよ？ むしろ悲しみなさいよ」

「ほえ？」

誕生日とは祝うものだとして「常識」で知っていた彩葉にとって、亜衣の衝撃発言には思わず目を点にするしかなかった。啞然と口を開き、ポカンとその場に立ったまま、頭の中では必死に亜衣の言葉の意味を理解しようと思いを働かせる。

「いいですか、彩葉さん。誕生日ってというのは、あんまり喜ばしい日じゃないんです」

「……ほ、ほええ？」

そんな彩葉に追い打ちをかけたのが、優希だ。ズバリ「喜ばしい日じゃない」と断言されてしまうと、もうワケが分からない。

「例えば……そうね。あれを見て」

亜衣が指をさしたのは、ここからでも見える食堂の厨房だった。

忙しく動き回るエプロン姿の寮生や、おばちゃんの姿がうかがえる。

「食堂のおばちゃん？」

その中でも一際目立つのが、彩葉の言う食堂のおばちゃんだ。外見年齢はもはや五十歳を越えているだろうと思われるのに、赤い口紅をこく塗り、派手なフリルで縁取られた白いエプロンを身につけている、正直に言ってしまうと怪物なみに「怖い」初老の女性だ。

料理の腕は天下一品。それは、彩葉達のテーブルの上に並べられている料理の数々を見れば一目瞭然だ。料理の腕が壊滅的である彩葉は、食堂のおばちゃんの料理にささやかな憧れを抱いているものの、じゃあおばちゃんになりたいのか、と問われると思わず鳥肌を立ててしまう。

クリスマスイヴということで、いつもより気合いの入ったおばち

やんのメイクには、苦笑をもらすしかない。

「あんたは誕生日を向かえることに、あのおばちゃんに近づいていつてんの。見なさいよ、あのおばちゃんやしわ数。そんでもって五十にもなつてのギャルメイク。しわに化粧がくいこんでるわ。あれじゃまるで化け物ね」

「最近またしわが増えましたよねえ」

「あんたは食堂のおばちゃんみたいになりたいの？ あたしはゴメンだわ」

彩葉はゾツとした悪寒を感じ、首を激しく横に振った。

「亜衣ちゃん、優希くん。食堂のおばちゃんに失礼だよ」

とりあえず波音が優等生っぽく注意するが、

「いいのよ、波音。どーせ聞こはしないんだから」

亜衣は笑って受け流す。

「とにかく、僕達は誕生日を向かえることに、一步、また一步外見がおばちゃん化していくんです」

「ふ、ふええ」

「あっちのおじいちゃんなんか、今にもポツクリ行きそうね」

次に亜衣が指したのは、数人の寮生達と仲良く談笑している老人だった。髪は色素が全部抜けており白い。しかも生えている毛の本数は極めて多いと言い難い。いや、むしろ少ないだろう。電球の真下に立っているの、光った頭がなんとも印象的だ。

腰は曲がっており、遠目で見ても身体が微かに震えていることが分かる。目元は垂れ下がっており、いかにも長い年月を生きてきた老人という雰囲気漂っていた。

「亜衣、仮にも中等部の教頭だぞ」

聖が活字を目で追いながら注意するが、

「聞こえりゃしないんだからいいの」

ローストチキンを口に頬張りながら、亜衣が鼻で笑う。どうやら亜衣に悪気は全くないようだ。

「分かりましたか、彩葉さん？ 年をとるってことは、あんまり喜

ぶべきことじゃないんです」

「で、でもみんなは誕生日は祝うものだって……」

「あんたの知恵が浅いのよ」

「そんな常識的な考えは捨てた方が身のためです」

夢のない二人の発言は彩葉の心の一番痛いところに釘を刺し、彩葉は今にも泣き出しそうな顔でうつむいた。誕生日であるこの日を心待ちにしていた彩葉にとっては、精神的なショックが大きかったのだろう。いささか食堂のおばちゃんや教頭先生には失礼だが、それは仕方ない。彩葉はまだ若いのだ。

落胆する彩葉を励まそうと、波音がそつとテーブルの下から取り出したのは立派な包装紙にくるまれた箱。

「亜衣ちゃんと優希くんは意地悪なんだから。……ほら、本当はちゃんと彩葉ちゃんの誕生日はみんなも覚えてて、プレゼントも用意してるの」

思いがけない波音の言葉に、彩葉はハッと顔を上げた。

「あつ」

「波音っ！」

亜衣と優希が慌てるが、もう遅い。彩葉の手のひらに渡されたプレゼントはずっしりと重く、包装紙は電球の光にあたって七色の艶を帯びていた。

「まあ、そういうことだ。とりあえず誕生日おめでとう」

ようやく聖が本を閉じて、彩葉を見上げた。

うつつと、彩葉は涙ぐむ。

「年をとることはいいことなの。食堂のおばちゃんだって、教頭先生だって、みんな私達の持っていないものを持っていて、素敵でしよう？ そうやって、歳を積み重ねて私達も素敵な大人になれるの。……さすがに、あの厚化粧には引くけど」

亜衣と優希は大げさにため息をつきながら、再びクリスマスデイナーに手を伸ばした。

聖は再び本を開き、波音は聖母マリア様にも負けないほどの穏や

かな笑みを見せる。

「　　っありがとぉ〜」

この日、彩葉がもつとも嬉しかった瞬間であった。

【スノードーム】

モミの木の電飾

底のスイッチを入れると
ピカピカひかる

煙突のついた家の窓

底のスイッチを入れると
ひかりがこぼれる

窓には人影

老婆かな？

ロッキングチェア　　ゆらゆら揺れて

暖炉の光さえも
見えるようだよ

鈴の音　聞こえる？

聖夜の夜に

逆さまにすれば

雪が降る

ほら

スノーギフト

あなたにメリークリスマス

【大晦日】

12月31日。大晦日。

学園の寮に住んでいた生徒達も今ではほとんどが実家に帰省して
いて、寮内は普段よりも閑散としており、もの寂しい静けさだけが
漂っていた。

しかし今日は残った寮生達が集まって寮舎の中を清掃する大掃除
の日だ。寂しさを紛らわせるためなのか、普段に比べると少ない数
の寮生達が大声で笑い声を立てながら寮内を掃除している姿があち
らこちらで見られる。倉庫の中から門松を引っ張り出して玄関前に
飾る寮の監督生、しめ縄を作る数人の男子。会う人全てが、心の底
から幸せそうな笑顔を満面に浮かべていた。

男子寮の屋上。大きな給水タンクと落ちないように試行錯誤され
た大きなフェンス以外には何にもない、殺風景な場所に霧夕拓夢は
いた。サボっているわけではない。自分に分担された場所の掃除を
終わらせたので、暇になった拓夢はここに来たのだ。その証拠に、
先ほど寮長からごほうびとして貰った赤いバラの花が一本、拓夢の
片手には握られている。

拓夢はフェンスにすがり、バラの花びらをちぎり始めた。ちぎら
れた花びらは、冬の風に乗って宙に舞い上がる。

拓夢は切りそろえられていない薄茶色の髪に、伶俐な美貌と凍て
ついた瞳が印象的な少年だ。端正な顔立ちだが、ポーカーフェイス
が上手いのか表情は浮かんでいない。瞳と同じように、冷めた表情
だ。しいて言うならば、不機嫌そう。

やがて、拓夢は最後に残った一枚のバラの花びらをちぎって、空
に飛ばした。いつの間にかバラの花びらは全てちぎられていて、拓

夢の手元には虚しくなった茎と数枚の葉だけが残された。やはりどんなに綺麗なバラの花だって、花を飾る花びらがなくなってしまったら綺麗だとは思えない。拓夢は茎をフェンスの隙間から落とすし、手をはたいた。少し、花びらの甘い香りが手に染みついてしまったようだ。それまでは無表情だった顔を、わずかにしかめる。

「嫌な予感がする」

「それはいつものことだよねえ」

ついこぼれてしまった独り言に、返答が返ってきた。
屋上に、誰がいる。

拓夢がうつむけていた顔をあげると、ちょうど視界には距離的に考えて屋上に入ってきたばかりだろうと思われる少女がいた。

肩につくつかつかないか微妙な長さの淡緑髪に、つぶらな焦げ茶色の瞳。華奢な体つきで、身長は拓夢よりも頭一個分低い。この少女の名前は緑川彩葉。拓夢が災厄娘として扱っている友人の一人だ。

「やった……やっと思つたあ」

彩葉は嬉しそうに両腕を真っ直ぐに伸ばした直後、脱力してコンクリートの上にペタンと座り込んだ。

「俺に用事か？」

「用事がなかったらこんなトコ、来ないもん。……さむっ」

冷たい風に、彩葉が身震いする。確かに彩葉の服装は白の長袖Tシャツの上にカウチンセーターを羽織り、下は黒のレースアップスカートをはいているだけのいたってシンプルな格好だ。十二月の冷え込む時期にその格好はさすがに寒いだろう。

「着こんでくればよかったものを」

「だって服がない……って、そんなことはどーだっていいの！」

何か急用を思い出したのか、彩葉は素早く立ち上がった。

「なんだ？ 用件を先に言え」

「今、学園を救えるのは、拓夢しかいないんだよ」

拓夢を見上げるその真剣な眼差しは、ただ事ではないことをものがたっている。

「は？」

「とにかく早く来てっ！ このままだと……みんなが失神して寮が大魔王に乗っ取られちゃう！」

彩葉の話の聞く限りでは大事のようには聞こえるが、拓夢は過去の経験で知っている。彩葉は本当にどうでもいいようなことを、大事件に見せかける特技を持っているのだ。どうせまたくだらないことだろうと拓夢は推測するが、とりあえず彩葉に引っ張られるがまま、現場に向かうことになった。

やって来たのは男女共同の寮の食堂。普段は生徒達で混み合っているイメージがあるせいか、静かな食堂にはどこか違和感を感じる。「連れてきたよーっ！」

彩葉は威勢のいい声を上げながら、食堂のトビラを両手で押し開けた。

食堂内には均等に強化ガラス板のダイニングテーブルが並べられており、所々に丸いテーブルと椅子が置かれていた。ここからだと厨房と、食堂はバイキング制になっているのでバイキングに使われる長机もいくつも見える。普段よりも食堂が綺麗なところを見ると、ここも大掃除の区域に入っていたのだろう。

「遅いつ！ あんたはあたし達に一体何分これを見張らせるつもりよ、バカ！」

食堂内に入って、いきなりくらった怒号に彩葉がしゅんとした顔になる。

「ふえ……だ、だってまさか拓夢が屋上にいるなんて思わなかったんだもん」

「屋上？へえ、サボつてたんだ、霧夕拓夢」

「やるべきことはした。何の騒ぎだ」

拓夢は近くのテーブルに堂々と座って、軽蔑の眼差しを向けてきた亜衣に視線を向けた。

いつもなら肩に流している長い桃髪を、今日は横側で一つにまとめて括っている彼女は時雨亜衣。サボリ病のある彼女がエプロンを着て、片手にはひばしを持ってしていることから、今日は珍しく掃除に取り組んでいたのだろう。通りで不機嫌そうな顔をしている。

亜衣は、ふんと鼻で笑った。

「察しのいいあなたなら分かるはずよ」

「分かるわけがないだろ」

拓夢がため息をつきながら足を一步踏み出した　そのとき、

「わっ、拓夢！下、下見て！」

隣にいた彩葉があたふたと手をバタバタ動かす。

「なんだ？」

と拓夢が聞き返したときにはもう遅く、食堂の床に倒れていた

人　を思いつきり踏んでしまった。彩葉は絶句し、亜衣は苦笑する。

誰かと思えば学校一の美容アーティスト、霜咲伊織しもさきいおりではないか。

ハーフなのか透き通るように柔らかい金髪に、長いまつげ。その美しい容貌とヘアークットの腕を誇る天才児が、無様なことに食堂の床に倒れている。うう、と微かに唸り声を上げているが起きる気配はない。

「ああ、すまん」

淡々とした口調で拓夢は謝り、伊織の上をまたぐ。その口調に悪びれた様子は微塵もうかがえない。

「あなたさ、犠牲者が一人出てるのよ。どうしてもっと驚かないの？」

「犠牲者？　ああ、貴様の暴力はついに人を失神させるようになってたのか」

「失礼ね。あたしは人に暴力を振るったことなんてないわよ！」

「伊織くん、まだ目が覚めてないんだ」

拓夢と亜衣の険悪な雰囲気さがさらに悪化していく中で、彩葉は伊織の側に座り込み、近くに置いてあった殺虫剤のスプレアの底で頬を突っついてみる。

「……彩葉」

「ん？」

その光景に気づいたのだろう。拓夢が怪訝そうな顔で彩葉の行動をまじまじと見つめた。いや、もっと正確に言えば拓夢の視線は彩葉の手に握られている殺虫剤をとらえている。

「なぜ、殺虫剤を持っている？」

「へ？」

拓夢の中で嫌な予感が芽生え始めたそのとき、

「拓夢さん、早くしてくださいよ。敵が逃げちゃうじゃないですか」

拓夢の不安をさらにおおる少年の声が聞こえてきた。こののんびりとした口調は、優希だ。優希は亜衣が座っているテーブルの後ろにずっとしゃがんでいたらしい。

「敵？」

「そうです……あつ！ そっちに行きましたよ！」

殺虫剤と敵。そして彩葉の手に握られている殺虫剤で大まかな状況を察した拓夢の目の前に、優希の言っていた 敵 が姿を現した。

「ふ、ふえええーっ！ で、出たあつ！」

「な、な、なっ、何やってんのよ優希！」

「僕のせいじゃありませんよ。そりゃ、敵だって動きます。生きてるんですから」

動く黒い塊。滑らかな光沢に、ピンピンと動く二本の触覚。その

姿が見えた途端に、彩葉は後ずさり、亜衣は素早くテーブルの上に非難し、優希はゆっくりと立ち上がった。

「……おい、誰だ？ 俺を呼んだのは」

ただ一人、拓夢だけは動じずに真正面から敵と対峙する。

「僕です。だって、こういうのは雰囲気的に拓夢さんの得意分野でしょう？」

肩にはつかないが少年にしては長い亜麻色の髪に、いつもと変わらぬ爽やかな笑顔。黒の魔術師と学校内でも異名をつけられるほど腹黒いことで有名な時中優希が、屈託のない笑顔を拓夢にむける。「だから何だ？ 俺が殺虫の専門家とでも言いたいのか？」

「前置きが長いよ霧夕拓夢！ 要するにあんたは早くそいつを殺せばいいの！」

「はい、拓夢さん。パスです」

優希が投げたものは放物線を描き、拓夢が反射的に掴む。彩葉が持っているものと同じ殺虫剤だ。

「だから私言ったの！ 早くしないとみんなが失神して寮が大魔王、ゴキブリに乗っ取られちゃうって」

「これのどこに失神する要素が……」

言いかけて、拓夢はハッと口をつくむ。

「伊織さんは卒倒でした」

全員の視線が家庭の敵、つまりゴキブリから未だに意識を取り戻さない伊織に向けられる。そう、伊織は突然テーブルの隙間から出てきたゴキブリを間近で見て失神した実態例だ。彩葉がごくんと息を呑む。

「拓夢、私達もいつかは伊織くんみたいになっちゃうのかな？」

「なるわけがない」

「拓夢さんしか頼れる人はいないんです」

「だからどうして俺が……」

「あんたはどっからどう見たって殺し屋って雰囲気じゃない！ 殺

し屋なら早くゴキブリを殺しちゃいなさいよ」

「いや、だから……」

「もしかして拓夢、ゴキブリが嫌いなの？」

「好きな奴がこの世にいるのか」

言いながら拓夢は殺虫剤を弱く振って中身の量を確かめる。無闇に殺虫剤をまき散らしたのだろう。中身はほとんど残っていない。

「へへ、怖いもの知らずの拓夢さんにも怖いものがあるんですねえ」

「あんたもゴキブリが苦手なの？ うっわ、意外」

「ゴキブリは好かんが、誰も怖いとは言っていない」

亜衣と優希の挑発的な言動はサラリと無視して、拓夢は彩葉の方に振り返る。

「そっちは中身があるか？」

「んん、うん。たぶんそっちよりはある」

拓夢は近くのテールブルに中身の入っていない殺虫剤を置き、彩葉からもう一本の殺虫剤を受け取った。こっちの方はずしりと重い。開封したばかりなのだろう。

「き、霧夕拓夢。一撃でしとめなさいよ」

「無理を言つな」

拓夢が殺虫剤の押すところに手をかけた。素早く亜衣と優希と彩葉が身構える。緊張の一瞬。拓夢が指に力をこめる。次の瞬間、殺虫剤は白い霧を噴射して、見事にゴキブリを覆い隠した。しかし、もちろんゴキブリも黙ってはいない。突然の猛毒ガスに驚いたのか、ゴキブリは霧から逃れようと拓夢の方に突進する。

拓夢は持ち前の運動神経でなんとかゴキブリを交わすが、ゴキブリが向かった先にいるのは失神して倒れている伊織と、その近くで身構えている彩葉。

「拓夢、パスっ！」

拓夢は迷わず彩葉に殺虫剤を投げ渡す。

ゴキブリはそのまま伊織の身体の上に乗る、あるうことかそこで止まってしまった。

「うう……伊織くん、ごめん！」

彩葉は多少の罪悪感を感じているものの、やはり伊織のために学園寮を犠牲にするわけにはいかないと考えたのだろう。伊織の身体の上に乗っているゴキブリに殺虫剤を向けて、噴射した。途端に白い霧がゴキブリを包み込み、意識を失っていたはずの伊織がむせかえる。かなり苦しそうだ。

「おい、彩葉。いくら何でも死ぬぞ」

見かねた拓夢が静止の声をかけるが、

「拓夢さん、寮の平和を守るためには一人や二人の犠牲は必要なんです」

優希によって止められてしまった。その純心な笑顔に罪悪感はあるでない。

やがて彩葉は攻撃を止めて、ゴキブリの様子をうかがう。さすがに大量の猛毒ガスを浴びたゴキブリは死んでいるだろうと思いきや、まだ生きていた。伊織の身体の上で触覚をピクピクさせながら、それでもゴキブリは生き延びようと伊織の身体を下りて食堂の入り口に向かって走り出す。

「ボケつとするくらいなら貸せ」

「え……いや、うん」

呆然とゴキブリの逃げる様子を眺めていた彩葉にしびれを切らした拓夢が、伊織を乗り越えて彩葉の手から殺虫剤を奪い取った。ゴキブリもずいぶん弱っている。これが、最後の攻撃になるだろう。ゴキブリはふらふらと危なっかしい足取りで食堂の入り口に辿り着く。

そこへ近づくのは、ゴスロリの服装がみんなの興味を惹き付ける食堂のおばちゃん。おばちゃんが手を振りながら近づくを見て、彩葉があつと口を開くが

グチャ

次の瞬間、静かな食堂内に響き渡る嫌な音。全身をかけめぐる恐怖の戦慄。誰もが言葉を失い、視線は一点に集中する。

「……あれ？ あれね……ゴツキー大魔王様が急にいなくなっちゃった」

「いや、いるだろう。あそこ」

食堂のおばちゃんはただならぬ重い空気に圧倒され、しばらくの間は動かなかった。そして、おばちゃんも感じたのだろう。何かを踏みつぶしたという感覚。

「や、やあね。霧夕くんに彩葉ちゃんったら」

「……あ、まだ動いてる」

彩葉が指したおばちゃんの靴。食堂のおばちゃんらしく、ハート柄の派手な若者向けの靴だ。その靴底からちらっと見えるのは、細い糸のようなもの。すなわち、消えてしまったゴキブリの触覚。

おばちゃんがそっと足をのける。すると、そこには押しつぶされてペチャンコになったゴキブリの姿があった。小太りのおばちゃんが全体重をかけて踏み潰したのだ。ゴキブリからは変な液体が微量だが血のように流れている。

妙な沈黙。おばちゃんがガタガタとゴキブリを踏みつぶした足を震えさせる。そして、

バタンっ

「ほ、ほええーっ！ お、お、おばちゃん、しっかりしてえ！ 踏んづけちゃうくらい生きてるうちは誰にだってあることなんだから」

「いやあーっ！ ご、ゴキブリが潰れてるっ！」

「うわあ、まさかこんな結末になるとは思いませんでしたねえ」

彩葉は伊織の隣に卒倒してしまつたおばちゃんに駆け寄り、肩を激しく揺する。

亜衣は顔を真っ青にして、身体をガクガクと震えさせる。

優希は爽やかな笑顔を崩すことなくゴキブリと、二人の犠牲者にそつと手を合わせた。

そして拓夢はというと、

「……バカだろ、お前ら」

すっかりと冷めた瞳で周りを冷静に見渡し、潰れてしまつたゴキブリを近くに落ちていたちり取りですくい上げ、迷うことなく窓の外へと投げ捨てた。

【お正月】

えいやっ、そらよつと餅をつく

うんしょ、どっこらしょつと餅をつく

杵を振り上げ

うんとこしよつ、どっこいしょと餅をつく

そのころ子供は お茶飲んで

そのころ孫は 凧上げて

そのころひ孫は コマを回して

そのころ夫は 夢の中

えいやつ、そらよつと餅をつく
ネバナバするまで餅をつく
うんしょ、どつこらしよつと餅をつく
まだまだ粘りが足りないか
うんとこしよつ、どつこいしよつと餅をつく

そのころ子供は やって来て
そのころ孫は 手を洗って
そのころひ孫は ぐっすり熟睡
そのころ夫は 目を覚ます

さあ みんなで餅を食べよう
今年もよい一年でありますように

【雪解けを待つ花】

私は久しぶりに外に出た。最近では寒いことを理由にずっとこたつに潜り込んでいたから、久しぶりの外の空気は懐かしくて新鮮だった。大きく息を吸うと、肺に冷たい空気がたまって心地いい。

今日も雪が降っていた。庭は小さな雪原だ。私は白い絨毯を意識しながら踏んだ。柔らかい感覚と、靴底を通じて感じる雪の冷たさが楽しい。私は同じ場所を何度も踏んだ。するとそこだけ、雪が溶けて茶色い地面が姿をのぞかせた。

私が歩くと、真っ白な絨毯にくっきりと靴の跡がついた。少し絨毯を靴跡だらけにしてしまうのはもったいないような気もしたが、私は庭を歩いてみることにした。でない、体重は増える一方だ。しばらく理由もなく庭をぶらぶらと放浪していると、小さな花を見つけた。そこだけ雪が溶けていて、花が芽生えているのだ。

久しぶりに見た草花に、私は感動した。こんなにも寒い中で、ど
の花よりも一足早く春を待つこの花がたくましく見える。

雪が溶けると、この花はもっと立派な花を咲かせるのかもしれない。
い。まだ、完全に開花しているわけじゃないから。そのときがきつ
と、春の訪れだ。

「で、これを見せるためだけにあたしを呼んだの？」

「すごくない？」

「すごいすごい。彩葉ちゃんの感性の豊かさにあたしは感動した
わ」

「もうすぐ春だもんね」

庭の隅に植えてある桜の木を見上げると、枝に雪が積もっている
にもかかわらず、たくさんの蕾が春にむけて身を膨らませていた。

「春ねえ」

「今年も一年がんばる」

「そーいうことは正月にでもほざいてなさい」

長い長い冬が終わり、短い春の幕開けだった。

【開封後の感謝事項】

ほら、遠くの方からウグイスの鳴き声が聞こえてきました。

太陽の日差しをさんと浴びた植物たちは、いきいきとしてい
てとても嬉しそうです。

縁側に座って、まったりとお茶を飲みながら春のひとときをくつ
ろいでいるあなた。

最後まで、愉快的仲間達を温かい目で見守っていただき、ありがとうございました。彼女達や彼達にも、春がやってきたようです。きつときつと、今年も素敵な一年を愉快的仲間達とともに送ることになるでしょう。

そして、おまけの本をかたわらに置いて、空を見上げているあなたへ。

今年も、素敵な一年になることを祈って。

(後書き)

当作品は12月に執筆したものであり、桜の花が見頃を向かえる現在においては、時間軸が大幅にズレております。太陽の白い光に照らされながら、パソコンをいじっている今現在。季節はずれにもほどがあるよなあ、としみじみ思いながら投稿させていただきました。

稚拙な文章で書かれた物語ゆえに、読みにくい箇所や背景が思い浮かばない箇所が少なからずあったと思います。

それでも、最後までざっと目を通してくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0138e/>

スノーギフト

2009年3月24日08時47分発行